

原著論文

体育における水泳授業の「導入」に関する一考察
—プラグマティック教育理論に基づく体育科教育方法論の展開—

神野 周太郎

(長崎国際大学 人間社会学部)

A Study on “Introduction” of swimming class in Physical
Education Classes

—Development of Physical Education Methodology of Instruction

Based on the Theory of Pragmatic Education—

Shutaro JINNO

(Faculty of Human and Social Studies,
Nagasaki International University)**Abstract**

The purpose of this study was to propose a desirable “introduction” when developing swimming class in physical education, and to propose knowledge on how to teach it. For this purpose, this study examined the “introduction” of swimming class in physical education based on concepts such as habit, inquiry and experience in the theory of pragmatic education composed mainly of John Dewey’s ideas. “Introduction as the beginning” in physical education has the power to expose children’s physical activity habits and seek corrections. In other words, it has the power to create a point between the present self and the future self. How to connect these two points appears in the students as an issue. The important thing was that an environment was properly manipulated, and that the students were able to develop their activities in order and connect them while experiencing the points step by step. Therefore, swimming class are performed in an unusual environment, such as underwater, so care must be taken when introducing them. Predictive introduction is one in which the lack of a habitual act reveals the current ability of one’s own, so causes the child to set a future to be reached by restructuring the habitual act. The criterion for judging the appropriateness or inappropriateness of introduction is whether the environment in which the children’s physical activities does not deviate too much from the environment in which the experience has been established.

Key words

Physical Education Methodology, Swimming class, introduction, Underwater rock paper scissors, Daruma float, bubbling, bobbing, habit, inquiry, experience

要 旨

本研究の目的は、我々が体育における水泳授業を展開する際の望ましい「導入」とその指導法を考える上での知見を提案することであった。そのために本研究では、デューイの思想を中心に構成されるプラグマティック教育理論における習慣をはじめ探究や経験などの諸概念を手がかりに、体育における水泳授業の「導入」について検討した。体育授業における「始まりとしての導入」には、子どもの身体運動の習慣を露わにさせ、その修正を求める力がある。つまり現在の自分と未来の自分という点を生じさせる力がある。この2点をいかにつなぐかということが課題として児童生徒の中に立ち現れる。重要なのは、環境の操作が適切になされ、児童生徒が活動を

順序だてて展開し、点と点を段階的に経験しながら接続させることである。そこで、ポビングやバブリングが有効であることを提案した。水泳の授業は、水中という非日常的環境で活動が展開されるため、とりわけ導入には注意が必要なのである。望ましい導入とは、習慣的行為が成立しないことで現在の自己の能力が露わになり、習慣的行為の再構成をさせることで到達すべき未来を子どもに設定させる役割を果たすものである。そして、導入の適切さ不適切さを判断する基準は、子どもが運動する環境がそれまで経験を成立させてきた環境から乖離し過ぎていないものであるかどうかである。

キーワード

体育科教育方法論、水泳授業、導入、水中ジャンケン、だるま浮き、バブリング、ポビング、習慣、探究、経験

1. はじめに

学校教育における教科「体育」は、児童生徒が多様な運動や各種のスポーツを実践する機会である。例えば水泳の授業を通して泳法を一つでも多く習得できるかどうか、その後の子どものスポーツライフを形成するか否かを左右する要因となることは疑いない。しかし体育において取り扱われる各種の運動領域としての運動やスポーツはあくまで方法であって、それらを通して達成すべき目的があり、そのために目標が設定される。教育の目的は「実存的レベル」「制度的レベル」「実践的レベル」という重層構造をとるとされるが、学校教育における「体育」は、教育目的の位相として制度的教育に位置付く（佐藤[1993]）。「制度的レベル」での教育を実践するにあたって、日本においては文部科学省によって学習指導要領が告示され、そこには学校教育において扱うべき内容等が取りまとめられている。

2017年の改訂によって新たに告示された学習指導要領には、学校教育において質の高い学びを実現するために、各教科における学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けることを重視する旨が掲げられている。中でも、生徒を育成するために、「主体的・対話的で深い学び」という学びの方向性を掲げ、授業の改善（アクティブラーニングの視点に立った授業改善）が求められる（文部科学省 [2017b]）。

中学校および高等学校学習指導要領では保健体育の教科において、運動や健康に関する課題を発見し、その解決を図る主体的・共同的な学習活動を経ることで、仲間と対話し協働して課題を解決する学習を引き続き重視しつつ、3つの資質・能力を確実に身につけるために、その関係性を重視し学習過程を工

夫することが求められる（文部科学省 [2017b]）。また、中学校学習指導要領を参照すると、中学校第1～2学年の目標は以下のように示される。（文部科学省 [2017] [2018]）

「体育」の目標

- (1)運動の合理的な実践を通して、運動の楽しさや喜びを味わい、運動を豊かに実践することができるようにするため、運動、体力の必要性について理解するとともに、基本的な技能を身につけるようにする。
- (2)運動についての自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて試行し判断するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝える力を養う。
- (3)運動における競争や協働の経験を通して、構成に取り組む、互いに協力する、自己の役割を果たす、一人一人の違いを認めようとするなどの意欲を育てるとともに、健康・安全に留意し、自己の最善を尽くして運動する態度を養う。

これを達成するにあたって、小学校から高校までの12年間で体育は体系的に単元計画が組まれ目標も一定の隔年で設定される。児童生徒は12年間を通して様々な運動やスポーツを実践することになるが、体育においては教育を達成するために実際に取り組む内容は多様であり、各運動の特性に応じた目標が設定されるところに授業のおもしろさ／むずかしさがある。従って、新たな単元に入る際の「導入」は「これまでの取り組み」と「これからの取り組み」の仲介を担うものとして重要な意味をもつと考えられる。ここに体育の授業における「導入」に対する検討の意義がある。本論では考察を進める中で水中ジャンケン、だるま浮き、バブリングやポビングに

着目するが、それらは子どもが水に慣れるための手段として、今日でも水泳授業に組み込まれている(高橋ら [2010])。しかし、先行研究を調査すると水泳授業においてそれらの手段を用いた導入が妥当である根拠を考察する論文は見当たらない。よって、その妥当性を示すこともまた重要な課題としてあげられる。

2. 本研究の目的

本研究の目的は、児童生徒が新たな運動実践を試みる授業場面を、定着した身体運動習慣が再構成される契機として捉え、体育における水泳の授業を展開する際の望ましい導入とその指導法を考える上での一助として水中ジャンケン等を用いることの根拠を提案することである。それは言い換えれば、人間身体が発現する習慣的運動は新しい場面(環境)において、児童生徒の能動的働きかけや他者からの外在的働きかけによる相互作用によって変化し適切な形式へと修正される。その過程そのものがもつ教育的意味を明らかにすることでもある。

3. 本研究における用語の扱いと方法

本研究においてキーワードのひとつである「導入」(introduction)は少なくとも次の意味をもつ。一つ目はある授業の一部を構成する「(授業自体の)始まりとしての導入」、二つ目はあるひとつの身体運動文化を発現するにあたって必要となる技術を習得する「身体運動文化への導入」、三つ目はある授業自体を一つの経験的場面として捉えることで、「ある授業は後続する授業の導入」とする考え方である。

またキーワードである「習慣」について、教育哲学者デューイ(John Dewey: 1859~1952)は次のように述べる。「人間は、理性の動物でもなく、またなおのこと本能の動物でもなく、習慣の動物である(Dewey [1983: p.88])。あるいは、パース(Charles Sanders Peirce: 1839~1914)の習慣概念は〈would be〉と結びついており、「もし~ならば、このような仕方で行動する準備ができてい」る」ということとされる(米盛 [1981])。つまり、デューイやパースのようなプラグマティックな見方に寄るとき、我々は習慣をいつのまにか身についた癖としてではなく、

特定の状況に遭遇した時、改めて考えるまでもなく「このように行動するであろう」という未来に対する準備と捉えることができる(宇野 [2013])。そして、人間の行為を後押しする「支配力」(hold upon)ともとれる習慣に注目する時、もはや習慣はひとつの「意志」(will)とみなすことができる(Dewey [1983: p.21])。

よって本研究では、デューイの思想を中心に構成されるプラグマティック教育理論における習慣をはじめ探究や経験などの諸概念を手かかりに、体育における水泳授業の「導入」について検討する。

4. 本 論

4.1. 「水泳系」の運動領域と導入

現行の学習指導要領が示すように、体育授業における「水泳系」の運動領域は小学校から高等学校を通して取り扱われ、小学校中学校においては必修の運動領域である(文部科学省 [2017])。従って、学校教育において水泳の授業は小学校から高等学校の12年間で取り扱われる運動領域の一つである。小学校低学年では「水遊び」「水慣れ」「楽しい運動」に始まり、小学校中学年では「泳ぐ運動」「呼吸をともない水中を進む」段階へ進む。小学校高学年に入ると、「泳法の学習(クロール、平泳ぎ)」が取り扱われ、中学校第1学年から第2学年にかけて泳法の種類はクロール、平泳ぎ、背泳ぎ、バタフライの4つが取り扱われる。中学校第3学年・高等学校第1学年から第3学年にかけては、それまでの学習を基に、「効率よく長く泳ぐ」「複数の泳法で泳ぐ」といった目標が設定される。12年間の学習内容を通して、児童生徒は最終的に「自分に適した泳法を理解する」「生涯スポーツの水泳について理解する」といった段階へと育成されなくてはならない(文部科学省 [2014])。

「水泳系」領域を取り扱う際には、児童生徒が普段の日常生活とは異なる「水中」で運動することに留意することになる。つまり、プールで展開される体育授業は、陸上での運動と比較して水の特性による環境変化や運動形態が日常の動作と大きく異なるため、身体的・心理的な配慮が必要となる(公益財団法人日本水泳連盟 [2012/2016])。とりわけ小学校低学年の児童は、身体性、水温環境、運動強度な

どの要因によって深部体温が低下しやすいことから、児童がより良い状態で授業に参加できるように体温低下を防止する対策の必要性が指摘される（甲斐ら [1987]、黒川ら [1991]、上田ら [1991]、若松ら [2007]）。また今日においては着衣水泳の意義にも注目が集まっており、「水泳系」の運動領域を取り扱う際には、十分な配慮のもと水中で安全教育を展開することの意義が問われる（松井ら [2016]）。

水中での運動は児童生徒にとって非日常的な運動環境であり、従って、水中という特殊な環境を想定した「導入」が必要となる。体育の教育法や指導法を検討するとき、授業の展開内容や運動の指導方法という考察対象が浮かび上がる。両者にはそれぞれ「導入」が存在する。授業自体への導入、運動それ自体への導入である。いずれにおいてもこの「導入」は、児童生徒が新たな環境に自身を投じ、身体と環境を相互作用させ、場面を形成させる機会である。児童生徒と環境（主体と客体）の相互作用に、我々は人間の経験の成立をみるのである（デュエイ [1988]）。環境（environment）において主体が行為するとき主観的に知覚するものを状況（situation）、客観的に認識するものを場面（scene）と定義し議論を進めるとき、身体活動やスポーツを成立させる身体運動（その形式）の発現成立条件は環境にあるといえる。

児童生徒が作用する環境とは、プールを始め、グラウンドや体育館、諸々の道具や他者などが挙げられる。定められたラインで作られたフィールドがあるように、スポーツ種目ごとに専門用具が必要なように、陸上であったり水中であったりというように、日常の身体運動やスポーツ活動における特有の身体運動文化は、特定の環境の上に成立する。体育授業では様々な種目が実施されるため適宜環境を用意することが求められるが、それは、児童生徒の人間身体から発現される身体運動がある環境に作用する中で、人間が様々な場面において多面的に行為を適応させられる器用さをもつことも意味する。当然この適応能力には個人差があり、故に身体運動が新たな場面に適応する（させようとする）過程は、運動やスポーツを介して子どもが何事かを体育的に学ぶ過程でもある。

新たな環境においては新たな身体運動の形式が必要となるが、その形式の獲得において避けられないのは、習慣的な運動形式が新たな場面（環境）において適切な（望ましい）相互作用を阻むということである。つまり、「新たな試み始めるものとしての導入」には行為の習慣性を露わにさせるある種の力がある。「水泳系」領域の体育授業を例に出せば、呼吸の方法は、陸上と水中とで異なるため、呼吸のための運動習慣が陸上と水中との行き来によって相対化される。陸上における呼吸のための身体運動は習慣的なものであり、水中における呼吸のための身体運動は非習慣的なものとして体感されるのである。

習慣化した運動形式とは「こうだろう」「こうかもしれない」という推測（推論）のようなものである。なぜなら習慣は一つの安定であり、行為場面がパターン化していることを意味する。新たな場面で一度行為として発現されれば、そこに「成功—失敗」、「できた—できなかった」という判断が下される。児童生徒の技能にもよるが、この場合「失敗」や「できなかった」「もっとうまくできる」といったものがそれまでの取り組みに注意を向けさせることになる（省察：reflection）。水泳でクロールを実践するとき、飛び込みや蹴伸びからストリームラインを形成し、水面に近づいたところで腕を使用し推進していく。その際に息継ぎに苦戦する児童生徒は少なくない。そうして彼らの中で現時点での自己の技能と、正しいとされる泳法のイメージ（こうやってできるようにになりたいというイメージ）が形成される。このように運動それ自体への導入によって習慣的運動形式が露わになることで現在と未来という二つの点が用意される。技術が習得され息継ぎができるようになるということはこの点と点が繋がれるということである。児童生徒が自ら運動を実践することで、現時点での自身の能力と到達したい未来が設定されるとき、それは一つの望ましい「導入」として成立しているといえる。しかし、客観的にみて課題が息継ぎの習得であるにも関わらず、児童生徒によっては「泳ぐためにはスピードが大事」だとか「そのためにキックがたりない」といった（決して間違いではないけれども）異なるポイントに意識が向くこともある。事実、ある程度の身体能力をもつ児童生徒

は息継ぎがままならないとしても、25mを泳ぎ切ってしまう。また、水泳を実践する際には、大半が水中での活動であるため運動している姿が視覚的にみえている部分が少ない。このことは、児童生徒が誤った改善ポイントを設定してしまう要因の一つといえる。ある種盲目になる子ども、彼らに対して別のものに視点を向けさせる、強制的な指導も必要であると仮定する。そこで問題なのは、向けさせた先にあるものが果たして子どもにとって意味あるもの（関心が向かうもの）か、ということである。つまり、導入によって生じた「現在」と「未来」をつなぐことのできる過程を歩ませるきっかけとなり得るかということである。このことは主体性が重視される現代だからこそ向き合わねばならない問題であり、従って教える側は児童生徒一人一人がどのような点と点の間にいるのかを見極めることが求められる。点と点が見極めきれない時、意味がないものと次なる行為は意思決定に後押しされず、その際の指導(instruction)は単に乱暴な力となる恐れがある。

ある出来事(体育授業)における「導入」の場面とは、客観的立場からそれを眺める時、児童生徒一人一人ごとに「現在」という点と「未来」という点を生み出す。そのような意味で複雑性を帯びており易しいものではない、言い換えるとある種の暴力性¹⁾をはらんでいるともいえる。

4.2. 「水泳系」の運動領域における経験の是非

体育の授業では学習指導要領に定められた各種の運動領域ごとに単元計画を作成し到達点(目標)を想定する。「最終的に他者と協力しバレーボールのゲームができるようになる」、「基本的な技術を身につけた上で走高跳ができるようになる」、こうしたものがいわゆる目標であるが、水泳の場合は、12年間の学習内容を通して、児童生徒は最終的に「自分に適した泳法を理解する」「生涯スポーツの水泳について理解する」といった段階へと育成されなくてはならない(文部科学省[2014])。着目すべきは、ひとつの到達点としての目標は確かに設定されているのだが、それに到達する過程は個人によって様々だということである。例えば体育においては「できるようになる」といっても「そのでき方は個人によって

違う」ということを許容できるのである。一方で、教授されるべき技術は当然あり、それを実行できるだけの技能が習得できるということはもちろん望ましいことである。このことは体育教師とスポーツ指導者の違いからも考察できる。つまり、学習指導要領に即して展開される体育授業においては、個別的なものとして閉ざされがちな児童生徒の経験を、いかにして全ての児童生徒に普遍的に教授させるのかという問いと向き合わなければならない。一方、スポーツ指導者は個人が設定する個別的な目標を達成させるために適切な指導を展開する。必ずしも享受させるべき普遍的な経験があるわけではない。

教育学者ピースタの次の言葉はデューイの教育理論を土台に議論を展開する体育学の研究(神野[2014a][2014b][2015a][2015b][2017]、Jinno[2017])や本研究において重要である。「行為における思考の役割についてのデューイの考えを理解するために重要なのは、我々が唯一新しい習慣を学びそして獲得するのは、有機体—環境の相互作用がさえぎられるような状況においてである、ということを理解することだ。」(ピースタ[2016:p.62])。

つまり、運動を実践していけるよう習慣形成の手助けをすることは体育授業の担うべき役割であるが、児童生徒に新しい習慣を形成させるためには、〈有機体—環境の相互作用〉が遮られる状況を与える必要があるということになる。つまり「うまくいかない」という場面が形成されることが必要なのである。人間の探究行為について、デューイは次のように述べる。「探究(inquiry)とは、不確定な状況を、確定した状況に、すなわちもとの状況の諸要素をひとつの統一された全体に変えてしまうほど、状況を構成している区別や関係が確定した状況に、コントロールされ方向づけられた仕方で転化(transformation)させることである。」(Dewey[p.108][魚津訳:p.491-492])。「不確定な状況」とは「行為者の思い通りにならなかった状況」であり、それは人間が行為した結果生じたものである。そこには行為主体者が想定した結果の実現を阻む不確定要素が内在しているが、それは行為主体者による状況の省察によって「原因」として認識される。その原因の解消によって「不確定な状況」は「確定した状況」(想

定した結果)へと再構成されるのである。デューイはこのような人間の営みを探究と表現するのである。

どのような状況が「有機体—環境の相互作用が遮られる状況」か、これについては教科教育学や教育方法の観点から考察する必要があることを付記しつつ話を進めると、児童生徒が〈有機体—環境の相互作用〉が遮られる状況を被り、省察により修正された行為によって問題を解消しないことにはひとつの経験は成立しない。遮られた状況の中、なおも進もうとするこの推進力は「〇〇ができるようになる」「〇〇ができれば面白そう」といった近い将来のイメージと考えられる。

〈有機体—環境の相互作用〉が遮られる状況とは、一般的に授業においては「課題」「タスク」「ゲーム」といった機会が与えられた際に生じるものである。つまり児童生徒にとって、何かに挑戦した際に「試行錯誤すれば達成できる」というイメージが連想されない内容であっては、到達点(arrival point)も見出されず、それに向かう過程が想像されることはない。よって、次にすべき具体的な行為を形成できない。先述した学びや経験の原理を踏まえ、水泳授業に目を向ける。Aさんの中にはクロールのイメージがある。このイメージはつまり最終的に到達したい(すべき・しなくてはいけない)未来である。いざ入水し、壁を蹴って腕をエントリーさせ、水をキャッチ、プルし、プッシュする。勢いに任せて水をかけばそれなりの速度で進んでいくため25mを泳ぎ終えるのだが、Aさんは泳いでいる最中、呼吸ができていないのである。

児童生徒が真に意味ある経験をするためには、課題にある種暴力的に「直面する」という出来事がなければならないのか、そして時と場合によっては指導者視線から「こっちだぞ」と振り向かせること(教育的暴力?)は必要なのか、という問いがたつ。そこで着目したいのが、教育的暴力といえそうなものの対極にあると考えられる「知的好奇心をくすぐる不可避の出来事」である。体育学には「楽しい」を追求してきた系譜がありそれは現在でも引き継がれている(Siedentop [1976] [1994])。教育において「楽しい」「面白い」は、その演出に焦点が当てられる傾向にある。そして、体育学、中でも教科教

育法においても、原理的にはホイジンガやカイヨワらのプレイ論(遊戯論)がある種の揺るがない基底理論とされる。その現状について議論することは本研究の目的ではない。ここで主張したいのは「楽しい」(enjoy)と「面白い」(interesting)はまず構造的にその概念の位相が区別されるべきものであり、「体育における学び」の質的向上を希求する我々には「面白い」についての原理的理解が重要であると考えられる。ここでいう「面白い」とは「知的好奇心」であり、体育授業場面における児童生徒の主体性についての問題にも繋がるものである。この「面白い」を原理的に捉えることで、教師は「面白い」を授業という形で構造化し、それを「環境」として児童生徒に提示することが可能となる。

ここまでプラグマティック教育理論を手がかりに「導入」の概念について検討した。それは体育における児童生徒にとっての良い経験とは何かを原理的に捉えることでもあった。次の項ではこれまでの原理的検討を踏まえ水泳授業の導入という具体的対象について考察する。

4.3. 水泳授業における呼吸動作の習得

水泳に対して苦手意識を持つ児童生徒にとって、呼吸方法の習得は普遍的課題といえる。息継ぎがままならないながらも25mを泳ぐ児童生徒の例を引き続きみていく。彼/彼女の場合、25mという限定的な環境では「泳げる」というだけで、それは泳ぎを習得したという評価にはつながらない。彼らは「自分に適した泳法を理解する」「生涯スポーツの水泳について理解する」といった段階へ到達する必要があるのである。

息継ぎの技術は必ずしも泳ぎながら習得させる必要はない。バブリング²⁾やボビング³⁾を組み合わせ実践させ、水上と水中を行き来するための呼吸法を習得させることができる。水中で泳ぐという出来事によって、陸上での呼吸というあまりにも当たり前の習慣は露わにされる。そして水中に潜るということに抵抗を感じるようになる。水泳授業において、水中に潜るという行為は導入の中の導入といえるが、ここで有効な方法となるのが「水中ジャンケン」や「だるま浮き」である。

「水中ジャンケン」は水中にいるという意識をそらすことで水中へのエントリーを抵抗しないものにする。そこには息を止めて潜ることが目的ではなく、息を止め潜った上でジャンケンをするという目的がある。ジャンケンをするという目的が上位に来ることで息を止めて潜るという行為は下位に位置付けられ、行為の重要度あるいは難易度を低く感じさせる働きがある。また、水中ジャンケンの面白いところはあいこが続いた場合、水中に長くとどまらなければいけない場面が生じることである。水中に長く止まるためには浮力をなくすために肺に入っている空気を抜く必要がある。そこで口や鼻から息をはく行為をすることになる。水中においては、この「はく」行為が重要となる。なぜなら水泳において呼吸法に苦手意識を持つ児童生徒は「呼吸」に対して「吸う」というイメージを強く持っているからである。呼吸は「吸う」と「はく」で成立している。ここに、普段生活する陸上と非日常的な水中の行き来を可能にするバブリングやボビングが水泳の導入において有効とする理由がある。

「だるま浮き」は、水中でしか味わえない浮遊感を実感する好機となる。児童生徒によってはこのだるま浮きが面白くてひたすら続ける子もいる。それは紛れもなく、水中でしか味わえない感覚に意識が向けられ、非日常的感覚を楽しんでいる証拠である。児童生徒の関心が向けられるのは授業内に用意された「少しだけ非日常的な場面」と捉えられる。

児童生徒の現状に応じて場面が適切に用意される時、子どもは日常から極端に断絶した出来事に身を投じるのではなく段階的に経験を積み上げていくことが可能となるのである。そして、さらに専門的な技術であるローリング⁴⁾などを学習するための準備が整うことになる。

運動やスポーツを介した教育を展開する体育において、「始まり」から「終わり」をいくら教授活動によって接続しようとしても、過程をあゆまなくてはいけないのは当の本人自身の身体であり、身体による行為である。つまり泳法における息継ぎができるようになるためにバブリングやボビングをするのは他の誰でもない、泳げない当の本人である。

児童生徒の身体能力は当然差があり、故に何を

持って教育効果（結果）とするのかは重要な問題である。しかし、体育が他の教科と異なるのは、教授行為がもたらす観察者の視点にたった「知識(knowledge)」の獲得もさることながら当事者として「知る(knowing)」ということであり(杉田 [p.35])、個別的な「できない」ことを成長の始まりとしてとらえられることである⁵⁾。しかし、先述したように「楽しい」で終始してしまえば、全ての児童生徒に培わせなければならない普遍的な学びへは到達できない。体育は、個別的なスタート地点からはじまりつつも、「主体的・対話的で深い学び」を通して、普遍的な学びに到達する使命をも背負っているのである。

5. おわりに

本研究は、プラグマティック教育理論を手がかりに体育における水泳授業の「導入」について検討した。体育授業において運動やスポーツを実践するにあたって、「導入」には、子どもの身体運動の習慣を露わにさせ、その修正を求める力がある。つまり現在の自分と未来の自分（目標）という点を生じさせるある種の力がある。この2点をいかにつなぐかということが探究課題として児童生徒の中に立ち現れるが、重要なのは、場面（環境）の操作が適切になされ、児童生徒が活動を順序だてて展開し、点と点を段階的に経験しながら接続させることである（経験の連続性）。デューイは経験の連続性について次のように述べる。「経験の連続性（continuity of experience）の原理というものは、以前の過ぎ去った経験からなんらかのものを受け取り、その後に来る経験の質をなんらかの仕方では修正するという両方の経験すべてを意味するものである（Dewey [1988：p.19] [2004：p.47]）」。

望ましい導入とは、ある種の乱暴さをはらんでいても、習慣的行為が成立しないという点で現在の自己の能力を露わにさせ、その修正を経て到達した未来を子どもに設定させる役割を果たすものである。そして、導入の適切さ不適切さを判断する基準は、子どもが運動する環境がそれまで経験を成立させてきた場面（運動習慣環境）から乖離し過ぎていないものであるかどうかである。水泳の授業にお

ける望ましい導入を考察する上で、バブリングやボビングの有効性を指摘されたが、それらは「水中運動への抵抗をなくす」という言葉では片づけられない重要な意味をもった展開内容であることが明らかとなった。つまり、「水泳系」の運動領域を扱う上では、呼吸動作の習慣を露わにさせ、それを修正させる指導方法が必要となる。

体育授業はもとより、教育課程に位置づく授業において、知識は体現されてこそ知識であり、実践することで習得度合いは結果として現れる。教育的意味は、点と点を接続する中で身を以て「知る」という過程を歩むことそのものにあるのである。そして、授業を一つの経験としてみると、望ましいのは経験が連続していくということであるため、ある授業は次の授業への導入として機能しなければならない。このことは至極当然のことであり、経験の連続性を保証するという点において強調される必要がある。すなわち「導入」にはじまり「まとめ」に終わるあるひとつの授業自体が次なる授業のための導入（隠れた導入：hidden introduction）となるのである。このことは、単元が変わる際にも、引き継がれる（べき）経験があるということの意味している。

これまでに、より良い体育授業の実現に向けて授業内容とその成果との関連に焦点を当てた体育授業研究が多く展開され様々な知見が示されてきた（出原 [1991]、宇土 [1992]、高橋 [1994a]、高橋ら [1994b]、高橋ら [2010]、岩田 [2012]、体育授業研究会 [2015]、岡野ら [2015]、梅澤 [2016]）。また、体育授業の組織的観察法を採用した高橋らの研究によって教師の授業における指導行動はマネジメント（management）、直接的指導（instruction）、巡視（monitoring）、相互作用（interaction）の4つに大別され、それらは現在では4大教師行動として認知されている（高橋ら [1989]）。教師の行動に関しては、教師の言葉がけ（長谷川 [2004]、江藤 [2015]）やフィードバック（深見ら [1997] [2003]）の研究も散見される。これらの研究はいずれも事例研究であり、実践を観察することで体育授業の改善に寄与するものである。一方で本研究はそれらを先行研究としつつも、習慣、探究、経験の原理に立ち返ることで、指導の方法を検討した。学習指導要領

においては水泳領域において達成されるべき事柄が小学校から高等学校にかけて段階的に設定されるが、実際には、生徒らが進級することが一定の技能の習得を意味しているわけではない。進級するごとに水泳技能上位群と下位群とで差が生じる。よって特定の生徒にとってはボビングやバブリングといった初歩的な導入が適宜必要なのである。それは教師が、現場に居合わせる眼前の児童生徒にとってどんな経験が必要なのかを常に思索せねばならぬことを意味する。それは実践を踏まえて原理へと立ち返り、そこから指導方法を再構成する営みである。この実践と理論の往還に体育はその理論基底を確かなものへと修正され、児童生徒に確かな学びを享受させることにつながるのである。

文中における注釈

*1) 暴力性をはらむ導入場面

このある種の暴力性をはらむ「導入」をいかに児童生徒にとって抵抗ないものとして展開するのか、そのことに現場では労が割かれ、それは当然のように思われるが、このことは現在だからこその動向といえる。教育学者の広田も言及するように、このことは教育問題における「教え」と「学ぶ」の関係が変容し「教え」側が自らの行為を正当化するイデオロギーを喪失し「学ぶ」側が優位となってきた現代の構造と無関係ではないだろう（広田 [2002]）。今日、「覚え込み」といった言葉で表現されるような強制的な教授はその優位性を失っているのである。

*2) バブリング

水中で鼻や口から息を吐く技術である。可能な範囲で鼻から少しずつ息を吐き続ける練習にも用いることができる。慣れは必要だが水中で口を閉じて「ン～～」と声を出すようにすると鼻から息が出ていくことを体験できる。水中で鼻から息を吐くことは、鼻に水が入らないのと、息を吐いておくことによって呼吸の構造上、息を吸いやすいという二つのメリットがある。

*3) ボビング

水上で息を吐いて吸うための技術である。水中に沈んだ状態からはじめ、水上に顔を出した瞬間に口から「パッ！」と息を吐く。呼吸の構造上、息を吐いたことにより息を吸うことが可能になる。バブリングと組み合わせることで、つまりあらかじめバブリングで息を吐いておくことで、より多くの息を吸うことが出来、呼吸が円滑にできるようになる。

*4) ローリング

クロールの際は、キックとともに両腕を交互に入水させそれに連動して水面に顔を上げ呼吸をするだけでは、十分な推進力を得られないし、呼吸もままならぬ

くなる。そこで、ローリングという技術が必要になる。腕をリカバリーする際、肩から大きく回すことを意識させる。すると、胴体も連動し、軸のように回るのである。これにより水面に上がりやすくなり、反対の入手中の腕は肩から水を掴みに行く感覚を得られる。

*5) 「知ること」と「知識」

「知ること」は過程であり、「知識」は結果である。児童生徒が自らの身体を動かすことで知ることを実践する体育は、VR 体験などに注目が集まる今日において、様々な形で表出する身体への回帰に何かしらの形で関連していくものと考えられる (柄本 [2001])。

引用及び参考文献

- 1) 出原 泰明 (1991) 『体育の授業方法論』大修館書店。
- 2) 岩田 靖 (2012) 『体育の教材を創る 一運動の面白さに誘い込む授業づくりを求めて一』大修館書店。 上田 毅, 黒川 隆志, 石川 博子 (1991) 「小学生の水泳授業における運動強度の指標としての主観的運動強度の有効性」『広島大学教育学部紀要』第 2 部40巻, 163-168 頁。
- 3) 宇土 正彦 他編者 (1992) 『体育科教育法講義』大修館書店。
- 4) 宇野 重規 (2013) 『民主主義のつくり方』筑摩書房。
- 5) 梅澤 秋久 (2016) 『体育における「学び合い」の理論と実践』大修館書店。
- 6) 江藤 真生子 (2015) 「小学校体育授業における教師の「言葉かけ」の検討 一表現運動とゲームの授業を事例として一」『日本女子体育連盟学術研究』31巻, 47-57頁。
- 7) 柄本 三代子 (2001) 「身体知へと回帰する専門家システム」『社会学評論』第51巻 4 号, 430-446頁。
- 8) 岡野 昇, 佐藤 学 (2015) 『体育における「学びの共同体」の実践と探究』大修館書店。
- 9) 甲斐 美和子, 埴 亜矢子, 斎藤 昇 (1987) 「学校体育における水泳」『日本水泳連盟科学技術委員会 編 水泳医学百科』南江堂, 10-14頁。
- 10) 黒川 隆志, 雀 泰義 (1991) 「児童のプールでの自由遊び, 水泳練習及びテストにおける運動強度の比較」『広島大学教育学部紀要』第 2 部39巻, 149-157頁。
- 11) 佐藤 臣彦 (1993) 『身体教育を哲学する』北樹出版。
- 12) 神野 周太郎 (2014a) 「体育学における経験概念の検討 一デューイの経験概念を中心として一」『体育哲学研究』第44号, 23-28頁。
- 13) 神野 周太郎, 大橋 道雄 (2014b) 「体育学における学校体育の本質の一端に関する検討 一デューイの教育学を中心として一」『東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系』第66集, 33-43頁。
- 14) 神野 周太郎 (2015a) 「学校体育論における民主主義的方向の模索 一デューイの民主主義的学校教育論に基づいて一」『体育哲学研究』第45巻 第 1 号, 25-34頁。
- 15) 神野 周太郎 (2015b) 「体育学における成長概念の検討 一デューイの教育学を中心として一」『体育・スポーツ哲学研究』第37巻 第 1 号, 29-44頁。
- 16) Shutaro Jinno, Seiji Inoue (2017) 「J. Dewey's educational philosophy and physical education」『国士舘大学体育・スポーツ科学研究』第17号, 1-12頁。
- 17) 神野 周太郎 (2017) 「デューイ哲学における探究概念の体育論的解釈の試み」『体育・スポーツ哲学研究』第39巻 第 2 号, 81-93頁。
- 18) 体育授業研究会 (2015) 『よい体育授業を求めて: 全国からの発信と交信』大修館書店。
- 19) 杉田 浩崇 (2014) 「「エビデンスに基づく教育政策・実践」時代における教師の専門職性に関する一考察 一ビースタの「学習化」に対する批判を中心に一」『愛媛大学教育学部紀要』第61巻, 31-40頁。
- 20) 高橋 健夫, 岡沢 祥訓, 中井 隆司 (1989) 「教師の「相互作用」行動が児童の学習行動及び授業成果に及ぼす影響について」『体育学研究』34巻 3 号, 191-200頁。
- 21) 高橋 健夫 編著 (1994a) 『体育の授業を創る』大修館書店。
- 22) 高橋 健夫, 長谷川 悦示, 刈谷 三郎 (1994b) 「体育授業の「形成的評価法」作成の試み 一子供の授業評価の構造に着目して一」『体育学研究』39巻 1 号, 29-37 頁。
- 23) 高橋 健夫, 友添 秀則, 岩田 靖, 岡出 美則 (2010) 『体育科教育学入門』大修館書店。
- 24) 高橋 健夫, 松本 格之祐, 尾縣 貢, 高木 英樹 編 (2010) 『すべての子どもが必ずできる体育の基本』大修館書店。
- 25) 長谷川 悦示 (2004) 「小学校体育授業における「個人の進歩」を強調した教師の言葉かけが児童の動機づけに及ぼす影響」『スポーツ教育学研究』24巻 1 号, 13-27頁。
- 26) 広田 照幸 (2002) 「〈教える一学ぶ〉関係の現在 (報告論文, 教育的関係の概念装置 一〈教える一学ぶ〉関係を問い直す, Symposium)」『近代教育フォーラム』第 11巻, 87-96頁。
- 27) 深見 英一郎, 高橋 健夫, 日野 克博, 吉野 聡 (1997) 「体育授業におけるフィードバック行動に関する検討: 特に子どもの受けとめかたや授業評価との関係を中心に」『体育学研究』42巻 3 号, 167-179頁。
- 28) 深見 英一郎, 高橋 健夫 (2003) 「器械運動における有効な教師のフィードバックの検討 一学習行動に応じたフィードバックと子どもの受けとめかたとの関係を通して一」『スポーツ教育学研究』23巻 2 号, 95-112 頁。
- 29) 藤井 佳世 (2017) 「批判的教育学の批判」『横浜国立大学教育人間科学部紀要 I 教育科学(9)』145-162頁。
- 30) 松井 敦典, 南 隆尚, 野村 照夫 (2016) 「日本の水泳教育における着衣泳の普及と取り扱いに関する論考」『水泳水中運動科学』19巻 1 号, 8-15頁。
- 31) 文部科学省 (2017a) 『中学校学習指導要領解説 保

- 健体育編』東山書房.
- 32) 文部科学省 (2017b) 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申) (中教審第197号).
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf (2019年12月20日閲覧)
- 33) 文部科学省 (2018) 『高等学校学習指導要領解説 保健体育編 体育編』東山書房.
- 34) 文部科学省 (2014) 『学校体育実技指導資料 第4集 水泳指導の手引き (三訂版)』株式会社アイフィス.
- 35) 米盛 裕二 (1981) 『パースの記号学』勁草書房.
- 36) 若松 斉, 新井 清司, 仙石 泰雄, 金田 晃一, 野村 武男 (2007) 「小学校水泳授業における児童の保温水着着用の有効性: 寒冷感および形式的授業評価への影響を中心に」『体育学研究』52巻2号, 201-211頁.
- 37) ガート・ビースタ: 藤井 啓之, 玉木 博章 訳 (2016) 『よい教育とはなにか —倫理・政治・民主主義—』白澤社.
- 38) Daryl Siedentop (1976) *PHYSICAL EDUCATION Introductory Analysis, Second edition*. Wm. C. Brown Company Pub. = ダリル・シーデントップ (前川峯雄 監訳, 高橋 健夫 訳) (1981) 『楽しい体育の創造』大修館書店.
- 39) Daryl Siedentop (1994) *Sport Education : Quality PE Through Positive Sport Experience*. Human Kinetics Publishers Inc. = ダリル・シーデントップ (高橋 健夫 訳) (2003) 『楽しい体育の創造 —体育授業の実践モデル—』大修館書店.
- 40) John Dewey (1983) *Human Nature and Conduct -An Introduction to Social Psychology-, The Middle Works 14*, Southern Illinois University Press, p9.
- 41) John Dewey (1938) *logic -the theory of inquiry-*, “*The Later Works Volume 12*”, Southern Illinois University Press, p.108. = ジョン・デューイ (魚津 郁夫 訳) (1968) 「論理学 —探究の理論—」『上山 春平 編, 世界の名著, 第48巻, パース ジェイムズ デューイ』中央公論社, pp.491-492.
- 42) John Dewey (1988) *Experience and Education:1938*, “*The Later Works Volume 13*”, Southern Illinois University Press, p.19. = ジョン・デューイ (市村 尚久 訳) (2004) 『経験と教育』講談社, 47頁.